

本朝の新聞報道によれば、東シナ海の天然ガス田の探査船調査で、中国が開発を計画する 2 つのガス田が、日本の排他的経済水域 (EEZ) 内のガス田に繋がっている可能性が高いと言う。中川経済産業大臣が昨日 18 日記者会見して明らかにしたものである。



該当ガス田は、「春暁」と「断橋」であると言う。

大臣は試掘に踏み切る可能性もなしとはしないとの考えを表明する一方、中国との交渉も続ける姿勢を示しているが、手緩いのではなかろうか。平成 15 年 8 月以降機会あるごとに地下構造のデータを求めても中国側は一切応じることもない。それどころか既成事実を着々と積み重ねて生産段階荷へ以降しつつあるようだ。政府は今後ともあらゆる場でこの問題を取り上げて話し合いを継続する意向を示しているが、果たしてそれで問題が解決するのか。解決すると考える愚かな者は外務省や中国礼賛組み位の者だろう。

中国側は形勢不利になると、またぞろ共同開発などを申し込んでくるのだろう。自国の資源開発に何故中国が関与するのか、関与させる必要など毛頭ない。日本の国力からすれば問題ない。

日本側も試掘や開発会社への興業権の付与を急ぐべきだ。中国側がこの点では一步も二歩も先行している。日本はやっとそれを検討する段階に達したのみだ。

考えてみると、日本の対応は後手・後手に廻っている、主導権を中国に取られっ放しである。日本の国益をどう考えているのか、不可思議だ。先見性を以って物事を判断してゆく習慣がない農業民族の特性故か、外国との関係に於いては極端に弱腰になる戦後日本の自虐精神の齎したものなのか、はたまた、対外関係において波風を立てまいとする曲解された「和」を尊しとなす精神構造の当然の帰結なのだろうか。

韓国と係争中の竹島問題にしてもそうである。中国や韓国が交渉相手となると極端に弱くなる。一方、相手がアメリカとなると、かの国が何も言わないからと高を括っているからなのか言いたいことをずけずけ言う。この豹変振りに驚かざるを得ない。

少なくとも政治家や官僚は毅然たる態度を以ってわが国の国益と国民の安全を確保すべきである。戦略性を以って、主導的に手を打つべきだ。

後手に廻ると言うのは理念がないということの証左であり、戦略性のなさの裏返しである。国民の顔色を伺ってから行動すると言うのではステーツマンと言えぬ。

徒に中国を刺激せよと云うのではない。正々堂々と渡り合うべきだ。そういう基本的な姿勢を堅持して、現行国際法の枠内で主導的に行動して、日本の国益を追求すべきであり、それが侵犯には断固とした処置を取るべきであると言いたいのである。

(関連： 折々の記 No20：毅然たるべし！(H17/7/22))

軟弱外交は侮られるのみである。否、既にそうってしまった感がある。主権国家たるの気概すら無くしてしまったのか。前の戦争の戦後処理は見事なまでに成功しているようだ？そろそろそれらから脱却して欲しいけれども。

政府は、三月いっぱい周辺海域の探査を続け、解析の範囲を広げるとともに、ガスや石油の有無がより高度に判断できる「特殊解釈」分析に着手。精度の高い地質構造調査を進

めると言う。ただ、埋蔵資源の確認や、中国側が主張する断層の有無の判断には、実際の掘削調査が欠かせない。

日本政府が一体となってこの問題に取り組んで貰いたいものと切望する。

今後とも注視してゆきたい。

(了)